

岩波
講座

日本文学史 第十四卷 近代

日本の近代化と文学

中村 光夫

岩波書店

日本の近代化と文学

中
村
光
夫

日本の近代化と文学という課題は、ひろい範囲の問題をふくんでいます。なかのあるものは現代にもかかわってきます。

近代化ということだけをとりあげても、我国の近代の兆しは、狭くみて江戸時代の中期以後、広くいえば、戦国時代の終りあたりからおこっています。そしてそれが形の上だけでも完全に達成されたのは、昭和二十年の敗戦によつてです。

したがって、この課題に本当に答えるには、数世紀にわたる日本の歴史の根幹をなすある巨大な運動あるいは精神の覚醒に、文学がどう応じ、それをいかに反映したか、あるいはどういう点で積極的に促進し、どこで阻止したかを、鳥瞰しなければならぬのですが、これは、限られた紙数でできることではないし、僕の貧弱な知識の及ぶところでもありません。

止むを得ず、ここでは話を明治維新前後の、極めて局限された時期にかぎりますが、これはあくまで大きなひとつの全体のなかの一節であり、近代化の過程は、それを否定する動きが、世界のさまざまな地域で見られるようになった現代でも、我国では現に進行中なのです。

「近代」とは一体何かということが、まず問題になります。これは英語のモダン（または他の国語でそれにあたる言葉）の翻訳でしょうが、この言葉には、元来、近ごろという意味しかありません。だから、たんに字義の上からいうと、僕等に近い時代は、どんな性格の時代でも近代とよんでいいわけです。

しかし今日一般に使われている「近代」は、まったく別の意味を持っています。面倒な定義は別にして、ごく大体の概念としては、十八世紀以来英国を中心としておこった産業革命と、フランスを中心として拡がった政治革命によってできあがったヨーロッパの社会を近代社会といい、それを範型として他の地域で行われた社会の改革を、それぞれの社会の近代化と呼ぶと考えると差支えないでしょう。

英仏を中心として、ほぼ十八世紀の後半に、はっきりした形をとった近代社会は、まず経済の面では、動力の機械化にもとづく、産業、交通、通信の飛躍的進歩による資本主義の発展であり、政治の面では市民階級の支配権獲得と、その理念にもとづく国家の再組織です。個人の独立、良心の自由、法律にたいする平等と人格の保証とが新しい国家の原則として確立され、貴族と傭兵に変わって、国民からひろく徴募された常備軍が、中央集権化された民族国家の支柱の役割を果たすようになります。

これらの政治理念は、すべて資本主義の運営に都合のよいものでした。しかしそういうことに、人々がこの社会組織の欠陥とともに気付いたのは後のことであり、「近代」はその出発にあたって、ひとつの大きな理想を孕んでいました。この時代に生きた思想家たちが目指したところは、一定の歴史的な社会組織に適合した思考の形態などでなく、人類が長い誤謬の夢から醒めてようやく把握した真理であり、正義でした。

フランスの革命が「自由、平等、博愛」を標語としたことはよく知られています。この「自由」の実体が、農民や都市の職人たちを封建的な束縛から解放するとともに、与えられていた生活の保証も奪って、いわゆる「餓死の自由」を持つ賃労働者をつくりだすことであったのは、今日では常識です。

しかしこの「自由」のために闘って血を流した人々にとっては勿論、当時の新社会に希望を托した者にとって、これは資本主義社会の必要とした観念形態などではなく、人間に本来備わる筈でいながら無視されてきた神聖な権利でした。

「近代」の資本主義に基盤をおく国家は、近代以前の絶対主義の国家より、たんに生産力においてすぐれ、軍事的に強力なばかりでなく、道徳的にも（より多く人類の理想と正義を実現しているために）、すぐれた国家と考えられていたのです。

「平等」についても、「博愛」についても同じことで、法律の前に万人が平等であることは、実際には貧富の甚だし懸隔を生んだし、十九世紀のヨーロッパの社会は内部にさまざまな偏見や闘争を孕み、外部にたいしては植民地国家として、かつて例をみなかったほど人種的差別観にもとづく制度をしましたが、この事實は、「平等」や、「博愛」という理想の価値を否定するものではありません。

「近代」の生みだした理想が、「近代」社会の現実によって満たされなかったことは、前者に「近代」を超える生命を与えると同時に後者に自分より高い思想を生みだした名誉をあたえるものでしょう。資本主義は今日世界の広い地域で否定され、そうでなくとも重大な修正をうけていますが、どんな社会体制をとる国も、「自由」を惡としているところはなく、「平等」「博愛」は前世紀よりかえて充実した内容を持つようになりました。

事物の歴史性を無視して、自分に都合のよい事態を自然の秩序と見るのが、ブルジョア思想の特色ともいえますが、それだけでなく、彼等の抱いた理想が、人類がかつて持ち得た理想のなかで、もっとも合理的で人間的なものであることは事実であり、その大部分は資本主義社会の現実を超えて、現代にも生命を保っています。

「近代」という概念は、したがって、それが生れた歴史的地盤をはなれて、ある一定の人間関係を持つ社会に、時代と地域を超えて、適用することも可能なのです。

ある社会の成員のあいだに、互に自由を認めあう平等な関係が樹立され、地域的な出生や血統より、各自の能力が重視され、競争が公然たる制度になり、外部の思想と商品にむかつて門戸が開放され、複数の思想、信仰が、それぞれに競争はしても排除しあうことなく、各自の信奉者を持つようであつたら、それは時と所をとわず、「近代社会」で

あるといえましょう。

むろん、歴史上では、こういう抽象化された「近代」を完全に実現した社会はかつてなかったに違いありません。しかしそれを近似的に実現した社会は古代にも近代にもあったので、ボオル・ヴァレリイは古代にも「トラヤヌスのローマやプトレマイオスのアレクサンドリア」には近代があったといっています。我国でも戦国時代の堺市、あるいは元禄以前の大阪の町人の間に、それに近いものがあったといえましょう。

我国がはじめてヨーロッパ文化と接触したのは、キリシタンの渡来のとときであり、活版の印刷、鉄砲などが伝えられました。その後鎖国時代になっても白石、吉宗などの時代から西洋の科学は天文学、暦学、医学などを中心にして、一部の学者の間で次第に深く研究され、理解されるようになったので、その水準は、今日一般に想像されているより、ずっと高いのです。長崎の通詞出身の志筑忠雄が「曆象新書」によってニュートンの学説を紹介したのは、十八世紀の終りごろであり、幕末には物理学、化学、博物学などの初歩は、洋学を修めた者の間では常識になっていました。

普通、明治維新の開国は、欧米諸国の自然科学を基調とした「文明」の所産が、軍事、経済その他の領域で、我国を圧倒する実力を持ったため、という風に考えられています。

当時の我国の有識者を驚かしたものは、たしかに「黒船」の機動力と武装であり、製鉄、紡績の機械、汽車や電信などもたしかに驚異的であったでしょう。しかしそれは彼等にとって驚くべきものではあっても、決して理解に絶した不思議ではなかったもので、蒸気機関の原理や、エレキテルの性質は、蘭学者にはよく解っていたのです。

福沢諭吉が始めて渡米したときの感想として、アメリカ人が方々の工場を見学させてくれ、電気鍍金や、砂糖の精製の方法など「日本人の夢にも知らないこと」と思っていたようだったが、「こつちはチャンと知つてゐる」「日本に

ゐるうちに数年の間そんなことばかり穿鑿してゐたのであるから、ソレは少しも驚くに足らなかつた」とくりかえして書いています。

これはおそらく当時の蘭学を修めた者の教養的特質を語っています。江戸時代の西洋に坎する知識、あるいは西洋の学問（この二つはほぼ同一視され、「洋学」という言葉で統一されていました）は、（軍事科学を含む）自然科学に限られていました。

彼等は、電信やガヴァルニ鍍金法の原理を知っており、水の沸騰点は気圧によって異なることも理解していましたが、「社会上政治上経済上のことはいつこうわからず」、ワシントンの子孫は源頼朝や徳川家康の子孫と同様、「大變な者に違ひない」と想像するのです。

当時の西洋に坎する学問が、自然科学系の知識や技術に限られていた事實は、それが我国の社会においては、少数の学者の、一般からは異端視された集団によって保持され、この学者たちの多くは、「洋癖家」である大名によって保護されたことと照応します。

我国の近代化を、たんに西洋の影響によって説明するのは、むろん間違ひです。徳川幕府による、諸大名の統制の厳しさは、封建制度のもとで、一種の中央集権の政府をつくりあげていたし、二百年のあいだ続いた平和は鎖国と武士中心の社会制度のもとでも、商業のめざましい発達と、町人階級の台頭を結果してしました。

封建社会の殻のなかに近代社会をつくりあげる諸要素がちょうど胎児のように次第に成熟して行つたのが、幕末の我国がおかれた状態であり、外国から加えられた圧力は、ちょうどひとりでは産れてくる力のない胎児を、時期より早く外氣にさらしてひとり立ちを強いる役割を果しました。

明治維新によって出現した新社会が本質的には近代社会でありながら、この革命の遂行が全部下級武士階級の出身

者にゆだねられたという事実は、それが社会の内部におけるブルジョア階級の力の蓄積と爆発によるものではなく、外部の圧力に適應するために、支配層のなかの比較的偏見のない人々の採った新制度という形で発足したことを示しています。

維新の革命の進行も、多くの革命がそうであるように、当事者の意図を超えて、それ自身の法則によるかのように進みました。しかしそれが出发点においてもっていた性格、——内面の成熟よりむしろ外部の圧力によるものであり、自主的な理想の実現の手段としてより、むしろ適應の体勢としてとられた改革であつたということ——はそこから生れた新しい社会にはつきり影響をあたえています。

この明治の変革期の「洋学」の特色は、知識の内容が、それまでの自然科学中心から、政治法律学中心に移行したことで、少数の学者の独占物でなくなつて、学校教育によって毎年一定数だけ養成される知識階級が、その担い手になつたことです。

いいかえれば、たんに知識が伝えられただけでなく、その知識伝達の機関に西洋風がとり入れられたことで、これが西洋の「文明」の浸透のいまひとつすすんだ段階であつたのです。

むしろ自然科学や技術が重んじられなくなつたものではありません。「開国」や「富国強兵」の国是は、それらのこれまでにない大規模な輸入を必要としました。

しかし問題は、これらの知識や技術の活用が、在来の社会制度では不可能であることが一般に認められ、そのためにも社会の変革が不可避であり、必須なものとして人々に感じられるようになったことです。

たとえば、もっとも端的な例として、軍事をあげると、西洋の軍艦と陸戦隊の威力に対抗する新式の銃砲を充分使いこなすには、どうしても西洋式に訓練された軍隊をつくりださなければならぬので、維新の前から、幕府をはじめ

め各藩が洋式の訓練に力を入れたのはよく知られています。

ところがこの火力と団体訓練に頼る新式の軍隊は、武士階級が存在を否定する性格のもので、軍備を拡充する要求は、いやでも徴兵制度の採用、武士の特権の廃止を結果せねばおきません。「百姓」出身の鎮台の兵士が最強の武士の団体に打勝った西南戦争が、この大改革の劇的な結末でした。

一挺の銃も、充分に使いこなすためには、近代的な軍隊を、四民の平等を原則とする社会を必要とすることが次第に理解されるにつれて、政治法律が人々の関心をあつめるのは当然です。

そのほか工業の移植や学問の振興なども、門閥を重んじ、職業の世襲を原則とする体制を打破し、競争と貧富の交替を「自由」に任かす新社会を前提とするので、西洋の「文明」をとり入れるための社会改革のプログラムが、多くの知識人の関心の的になるのは当然です。

西周が津田真道とともに、文久三年（一八六三）にオランダに留学したとき、「地理算数格物化学」などの学問はすでに我国につたえられているから、自分は「西方政事」について学びたいといって、法律学と経済学を学んだのは、こういう時勢の動きを象徴しています。

福沢諭吉も、はじめは自然科学を中心とした洋学を修めていたのが、アメリカやヨーロッパを实地に見聞してから、政治、経済に深い関心をよせるようになり、幕府の禄を食みながら、なかば公然と倒幕を唱えるようになります。

「西洋」にたんにひとつの技術を学んだに止った在来の学者と違って、それらの科学と技術を生んだ背後の生活にふれ、世界の事情にも臆気ながら通じるようになった当時の洋学者たちが、彼等をたんに珍奇な知識を持つ職人として遇している封建社会の支配者たちにたいして、軽蔑と不満を抱くのは当然であり、無知な支配者たちに高い地位と権力を与える門閥の制度を廃止することは、彼等のためだけでなく、社会の利益のために必要なことと考えます。

明治維新は、下士階級による、上士階級からの政權の奪取であり、多くは下士の身分の出である、これらの書生たちに、自由な出世の道を拓く変革でした。

維新の政治を担当した志士たちが、主として漢学によって育てられた書生たちであったことは、彼等が一度「開国」の方針を決した後に、西洋の「文明」と、その我国における代表者である洋学者を尊重することを妨げませんでした。明治初年ぐらい、我国で「知識」が重んじられた時代は他になかったといってもよいので、徳川時代に幕府とつながりを持っていた洋学者たちが、大部分新政府に仕えるようになったのは、ひとつにはそのためです。

福沢諭吉は、鎖国時代に、外国に漂流した漁民などが「物珍らしく持てはやされ大名高家の御奥に召され」と同様、「今の学者も十年以来は恰も此漂流人に類し、洋学者とあれば政府に用ひられ、諸藩県に雇はれ、……多分の御金を戴き、居は志を移し、錢は鼻を高ふし、袷一枚の虱書生が一夜作りの若旦那に変化し、……西洋料理時計、意気揚々として巻烟草吹かしたるは」(『学者の三世相』)と揶揄しています。

福沢諭吉、成島柳北、栗本錦雲など、新政府に仕えなかった人々は、ジャーナリストとして、明治の社会に進路を見出して行きました。

むしろ実際に明治政府の政權を握っていたのは、岩倉にしろ、三条にしろ、木戸、西郷、大久保らにしろ、漢学育才の、西洋の事物には確かな知識を持たぬ人々であったと思われるが、彼等にとって、福沢や西のような学者はたんなる新知識の職人的な伝達者でなく、国家の進むべき方向、政治の大綱について教えを聴くべき師表であったので、彼等をはじめ、中村正直、津田貞道、加藤弘之、西村茂樹らが、森有礼の主唱のもとに「明六社」を結成したとき、彼等は政府にたいする忠言者をもって自任し、彼等の言説はそのような權威をもって官民から迎えられました。

西周が『明六雑誌』で、「人民の愚」を放置するのは「独り政府の罪たるのみならず……賢智の徒たんとする者は

先んじて之を救ふことなくば亦世道上に於て其罪なしと云ふべからず」といつているのは、当時の知識階級の自負と使命感を示しています。

「資本主義は自分の姿に似せて世界を変革する」とマルクスがいましたが、十九世紀についていえば、それに「自分の従属物として」と付加える必要がありました。この世紀の動きは、全世界のヨーロッパの資本主義国への植民地化ということで要約されます。

日本の開国はアジア地域における列強の勢力伸張のひとつの達成であり、同時にその後退の第一歩でもありました。僕等は我国の近代化が蒙ったさまざまな歪みや、そこから生じた不幸な事態を、はっきり見ておく必要があると同時に、国民の幸福を無視した傾きがあるにしろ、ともかく外面的には目醒しかった勃興が、アジアからアフリカにわたる、——ときにはハンガリーからポーランドに及ぶ——多数の被圧迫民族に及ぼした影響を無視してはならないのです。

ヨーロッパ諸国の植民主義を、アジアだけでなく、世界で最初に破ったのが日本であることは、ひとつの歴史的事実です。それが自他ともに不幸を強いる歪みをともなったのは何故かが、僕等に解く責任のある謎としてのこされています。

二

以上のように、我国の近代化は、西洋化——すなわち異国の風俗の採用——と同義語として、しかも政府から命令された西洋化として、ときには民衆の抵抗を排除して、強行された点に特色があります。

むろんこういう改革が少数者の恣意によってだけ行われる筈はなく、それが可能であったのは、その条件が——未成熟ながら——準備されていたことを意味します。前述のように自然科学の知識が学者のあいだで或る程度理解され、普及していた事実は、これを象徴するものでしょう。

また自然科学の基礎になる合理的思惟が、そのまま社会制度にむけられたとき、近代の諸観念を生むことも可能性としては充分考えられます。しかし実際には、科学が切花のような新知識として伝えられたためもあって、そういうことはひとつの社会現象としては見られなかったようです。

反対に、医学、理学、工業、政治学、法律学などがそれぞれ連関のない別の学問として輸入されたところに、我国の近代の特色のひとつがあると思われます。

絵画における遠近法の発見が、個人の自覚と表裏しているように、自然科学の根底をなす自然界と心情の世界との分離、合理的思惟による自然の因果関係の解明は、それに携わる者を、理性によって肯定されぬ伝統や因習の否定に導く筈ですが、そういう現象が社会の一部にはつきり見られるようになったのは、数十年後でした。

福沢諭吉は慶応義塾の沿革を述べ、それが新しい時代の気風をつくって行った経緯を次のように述べています。

従前の学風は単に技術を西洋に取るの趣意にて、医術より入りて兵事に及ぼし、築城鑄砲造船操練等は最も世人の注目する所なりしかども吾々の一類は尚ほ一步を進め西洋の学問を社会の人事に適用せんとて竊に志したるこそ當時に在ては恰も非望に似たれども同志の信ずる所皆その方向を共にし、既に西洋学を単に技術とせざるときは彼の国の歴史を読むは勿論、政治経世の学問もあらんとて頻りに其書を求めて、米国出版の万国史并にポリチカル エコノミー等を得たり。万国史は先づ和漢の史類に似て大同小異なれども、ポリチカル エコノミーは実に面白く、其議論の精密なること着々意表に出で、恰も吾々に固有する旧漢学主義の心事を顛覆したり。依て此書名を何と訳す可きやと相談の上、何分にも穩なる文字なれども仮に経済論としたるは即ち日本に西洋経済論

の始めなり。西洋既に経済論あり、然らば則ち論語大学の如き倫理の書もなかる可らずとて語合ふ折柄小幡篤次郎君が市中にてモラル サイアンスと題したる原書の古本一冊を購ひ来りて之を読めば則ち道德一偏の論なり是れは妙なり直に同様の書を買はんとて、米國へ注文したるはウエーランド氏のモラル サイアンスにて之を修身論と訳したり就中既に経済を講じ修身の書を読み又法律の原理等を知る恰も我平生より信ずる所の學問に根柢を得たる心地して最早や天下に恐るゝ所のものなく、全日本國の古學者流を相手にするも之を一手に引受けて圧倒す可しなど云ふ意氣込にて真一文字に進行する其中に世の攘夷論はいよゝますゝ熟して遂に維新の騒亂と爲り……（『洋學の命脈』）

長い引用になりましたが、この維新直前の彼等の「一類」の精神の様相には、我國の近代の性格がほとんど予言の正確さで象徴されています。

彼等のなかに、在來の「古學者流」にあきたりぬ、新しい「社會の人事」の在り方を求めようとする欲求が芽生えていたことは事實です。「門閥制度は親の仇」といい、自分をたんに技芸によつて幕府にかかえられる雇人、お邸に入する雪駄直しの賤民と同様と信じていた論吉らの心底に、四民の平等と個人の自由を原則とする社會への憧憬が生れなかつたわけはありません。

しかしこの「我平生より信ずる所」に根柢を与える「學問」はやはり西洋から輸入されたものでなくてはならなかつたので、自然科學の輸入も、そこで表われた新しい考え方が古い制度を破るところまで熟する暇がなく、外國から別の領域の、新しい「思想」を輸入するという形でそれを行わねばならなかつたのです。

すなわち、思想の内容には「漢學」と「洋學」との間で大きな距りがあるにしろ、ともに外來の權威であることで、それをうけとる我々の心理の面で、はっきりした共通性を持つてゐるのです。

近代社會の根柢にある個性の自覺は、本來もつと孤独なものである筈です。モンテーニュの隨筆は、これまで人々

が註釈することしかしなかった古典の章句にたいして、いうにたりぬものとされてきた些々たる自己の経験を対置し、後者によって前者の真偽を判別するという破天荒の試みから生れたものです。

彼はここであらゆる「古学」の權威にたいして、裸の自分を対比し、それを中心として世界をこれまでと別の秩序に編成しかえようとしています。精神の領域での遠近法の発見です。

しかし論吉の場合には、「すべてについて疑う」ことを必要としなかった、というよりその暇をあたえられなかったのです。

このことは「洋学」が結局漢学的にうけ入れられたことを意味し、さらに明治維新が下士階級による革命であり、平民はその動力であるよりむしろ受動的な立場からこれを受入れるだけであつたという事実とも照応します。

幕末と明治の初年は、これまで「技術」の産地としての意味を持っていたにすぎなかった西洋がそれ自身の「歴史」と「経済」を持つ人間の社会としての姿を現わし、その力と実際に触れ合うことで、我国の近代化が国家の独立を保つに必須の条件として認識され、強行された時代です。このとき我国の採った欧化政策が政府の自主的な決定によるように見えて、実は外国の圧力によって、これに対応する唯一の策として採用を強いられたという事情は、在野の書生であつた福沢たちが、内心に鬱積した感情を実行にうつすために西洋から輸入した「学問」を拠り所としなければならなかった事実と表裏します。

この時期は、西洋の「学問」がはじめて社会生活を実際に変えて行く力を持った時代であり、その「水火の激する」ような変革のなかで、その「学問」の保持者である知識階級はかつてない社会的実力を持つことができました。明治初年の政府は、当局者みずから認めたように、「書生」の政府であつたといえます。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と「学問のすゝめ」の冒頭に書いた福沢は「学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり、下人となるなり」と続けて書きます。

四民平等の原則の最初の実効は、武士間の身分、家柄による差別の徹底にありました。將軍と直參の支配が倒れて、天朝と陪臣の天下がきたのです。維新の変革は、全国の貧しい藩士の子弟たちには、「學問」を修めて出世を計るために上京する絶好の機会でした。遷都早々の東京に無数の書生たちが、各藩の貢進生として集ってきたので、のちに逍遙が新時代の東京で、とりわけ眼につくのは人力車夫と書生だと「当世書生氣質」の冒頭に書いていますが、この二つは同じ文明の産物でした。

当時の「文明開化」の風潮が極端に功利的な性格を持ち、西洋文明の実利的側面だけがまず着目され、強い政治力を背景として輸入されたのは、すでによく知られています。

西洋の「學問」は曆學にしろ、医学にしろ兵學にしろ、元來が実用の學問として輸入されたので、論吉らの時代には、それが政治經濟、倫理などの面まで拡大されたわけですが、これは社会生活にかんする功利の學というべきで、要するに「修身」から「治國平天下」までの内容を西洋風に改めようとするものでした。容器は相変らず漢學風であつただけでなく、そのなかの經學の範圍に限られていて、詩文の世界を含みませんでした。

(もともと、論吉は詩や俳諧など、無用の道楽や風流を「學問」のなかに入れることには終始反対でした。彼はこうした態度をとることが、學問の必要を町人や農民に納得させるのにとくに必要と信じていました。)

したがって彼が西洋から得ようとした文明は、政治經濟軍事をはじめ、人民独立の氣象から一夫一婦の制度まで、社会生活の万般にわたる内面と外面を有機的に含んでいましたが、演劇、音楽、美術、文学などは、そこから除外されていきました。

そういうものは、在來の我國のもので間に合うし、もしなしですませられればその方がいいと彼には思われたのです。

このことは彼が感情生活の多くの面で武士氣質の持主であつたのを意味し、また國家の安危が第一の関心事であつ

た時代の性格も語っています。

しかし、それは根本においては、明治維新にさいしては「近代」への移行が個人の自覚なしに行われたこと、あるいはそれが出世への欲望を含めた欲情の解放という形でしか行われなかったことの結果です。

当時一般の人々にとって、「近代」は自分の内心の営みとは無関係な、外国から移植された新しい社会制度であり、この新奇な人間関係は、それが現実の力として働くようになってからも、人々を外部から動かすほかはないのです。

明治初年の社会は、もし意識の表面で軽んじられた伝統や因習が、人々の生活のあらゆる局面を、充分強力な惰性でみだしていなかったら、堪えられない空虚な時代であつたろうと思われます。本来が人間中心、個人本位の時代である筈の近代社会の諸制度を、その中核を無視して、外面からだけとり入れて行こうとする努力の無理は、軽蔑され放棄された旧社会の習俗が死滅するにつれて、明かになりました。彼等が感じることなく過した内心の空虚は、当然次の世代の批判的になる筈でした。

こういう新しい世代の登場した明治二十年前後から、我国の近代文学がまったく新しい形をとるのは偶然でありません。

三

さきにひいた「学者の三世相」という戯文で論吉は明治初年の洋学者が稀少価値を尊ばれた時期を「学者の第一世漂流人の時代」とし、それにつぐ現代(すなわちこの文章のかかれた明治十年ごろ)を「第二世人力車夫の時代」として、ようやく整備された教育機関から、年々数をふやして養成される知識階級は次第に供給過剰になり、ちょうど人力車夫が殖えすぎて、競争で賃銀を引き上げても乗り手がないように、「学者の立場^{たてば}にあくびして客を待ち二百円の月給